
規格外の行く道（仮）

楽隠居

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

規格外の行く道（仮）

【Nコード】

N9490Z

【作者名】

楽隠居

【あらすじ】

最初東方に行つてからだいたいのところで別世界に行きますが、しばらく東方になると思います。間違い、指摘、気になる点がありましたら感想の方に書き込みお願いします。

プロローグ（前書き）

自分の勢いで書いてしまったので駄文だと思えます。

こついう小説が苦手な方は閉じるボタンでウィンドウを閉じていただいても構いません。

プロローグ

ここは何もない空間、そこに一人のジジイが座っていた。

「さて、こいつはいつになったら起きるのかのう」

俺はその言葉に気がつき、体をひねった。

「お、こいつようやく目覚めるのか」

「あ、あと五分」

ふう、全く、人の眠りを妨げやがって。

「いつまでもグースカ寝るんじゃない！はやく起きろアホ！」

野太い怒鳴り声と腹部への衝撃を感じ、俺は目を開けた。

「痛ててて、休日の朝くらい長く寝かせてくれても……」
「コ、コ、ド
コ？」

目を開けると見知らぬ光景、周り一面真っ白の空間だった。

「こいつは、そうじゃのう。神界の一部と想っとくれ」

俺の目の前のジジイは変な妄言を吐いた。つーかこのジジイ誰だ？

「妄言などではない！本当のことじゃ！それにワシ神様じゃし。」

は…？神様？おいおいいい加減にしてくれよ。全く、頭がボケたか。
「頭はボケてないわい！今のお前の体を見てもそんなことが言えるか？」

体？別におかしいとことか……ん？

「えええええええ！体がねえ！は？なぜに？Why!!！」

え？マジ体無いんだけど。やべえよこの状況。

「ふう、ようやく自分の状況が理解できたかの？」

「どうなってんだこれ」

いや、マジヤバイ、本当にヤバイ。

「ふっふっふ。教えて欲しいかの？」

くそっ、なんか笑い方がむかつく。まあまず話を聞いてみるか。

「ああ。で、どうして俺はこんな姿なんだ？」

「ふむ。では教えてやろう。お前は死んだのじゃ。」

やっぱり俺は死んだのか。

「で、それから？」

「ん？なんかもつとこうリアクションはないのかのう？」「えええええ

「!まじで!」とか「嘘だろ。そんなの。」とか

「いや、だいたい分かるだろう体が無い時点で」

「いや、まあそうじゃが、でもリアクションくらい欲しい」で、それで?」「……………は?」

「いや、死んだのは分かったとして、もっとなんか有るだろ。死因とか、なぜここにいたのか。」

「話は最後まで聞いて欲しいのう。…で、死因じゃったか、それはまあ、こう自然の摂理から外れたような感じ」「早く言え」「わしが殺したのじゃ」

「まあ、そのくらいは予想できる」

「なら聞かんでよかったじゃろう」

「はっはっは。どういつ答えが返ってくるかと、つい。」

「はあ、もう疲れたわい。では話すとしようまず理由からじゃが、おまえ、アニメとか漫画が大好きじゃな?」

「ああ。」

「ワシ、神様の中でも最高神より上の創造神の地位での、暇だったんじゃ。」

「これまたなぜ?」

「うむ。ワシとても偉いじゃろ。それでいう、みんながワシの負担を減らそうとしてのう。最終的に仕事
が回って来なくなったのじゃ。」

「いや、自分でもらいに行けばいいじゃん。」

「何回かそうしたわい。でも皆が「私たちがしますので創造神様は休んでください」と言ってくるのじゃ」

「まあそれは取りづらいな」

「そうじゃろう。それで暇になったワシは自分で仕事を作ることにしたのじゃ」

そうなるとその仕事っていうのはやっぱり。

「それが俺、と」

「そうじゃ。最近おまえのいた世界では転生モノとかそのへんが流
行っておるじゃろ。」

「まあそうだが……ソユコト？」

俺に転生しろと

「うむ。お前の考えとる通りのことじゃ。嬉しいか、嬉しいじゃろ
うっ。」

「ああ、嬉しい。だが一つ聞かせてくれ。あんたはなぜ俺を選んだ

「？」

「ああ、そのことかのう。それはな、おまえの想像力が豊かで面白くなりそうだったからじゃ。」

「そうか。分かった。で、どこに転生させてくれるんだ？」

「ふっふっふっふ。それはのう。おまえの好きな東方の世界へ行かせてやる。」

このジジイ流石神様だ。

「マジか！やったぜ！で、で？俺はなんかもらえるのか？」

「うむ。いくつか特典をやる。それくらい自分で考えてもらっても構わんぞ。」

こいつ、転生の話辺りからテンションとかがガラツとかわったのう。

「少し規格外になってもいいか？」

「うむ。構わん。ワシ、創造神じゃから大体のことは出来るからのう。ただし、あまり強すぎるものは少し制限を掛けさせてもらっぞ。転生してすぐに暴走とかになったら話にならんしの。」

「ああそれで構わない。」

「マジで暴走とかそんなことになったらこちらも暇つぶしにならんからのう。案外人間を眺めるのも楽しいから期待しとるぞ。」

「分かっているつもりだ。」

……考え中……考え中……考え中……考え中…………終わり……

「この4つでいいのこのう？」

「ああ。」

「でも、この4つじゃ心配じゃからサポートとかワシと通信できる端末とかもオプションでつけとくからのう。」

このじいさん結構いい奴だな。

「サンキュー。で、これからもう出発か？」

「いや、まだじゃ。おまえには体とか名前がないじゃろ。それを今から決めるからのう。」

「そういえば体がなかったな、それに名前もおまえとしか呼ばれてないな。」

「じゃからそこらへんの情報を決めるために、この人形に入ってもらうぞ。」

「このマネキンみたいな人形に？どうやって？」

「はいろつと思えば入れるはずじゃ。まあ試しにやってみい。」

いやいや、そんな曖昧な説明をされても。

「ごうか？いやごうか？くそっ、わからん。」

「入れんか？まあ長い間使ってなかったからのう。仕方ないから強引に入れてみるぞ。」

「マジでかって」グッググググググ

「痛い痛い痛い痛い痛あーいー！」ゴリユ！

「（嫌な音がしたのう…）；。ゝ。ゝ。ゝ。ゝだ、大丈夫かのう？」

「な、なんとか……………」

「（ふう。良かったわい）じゃ、じゃあこの端末に名前を記入してくれ。その他の情報はワシが書き込むからのう。」

「イテテ…ん？これでいいか？」カタカタカタカタツ カタンツ

「ふむ。まあいいじやろう。その他は後で設定紹介で紹介するからのう。しかし、名前が『神羅』、これでいいかのう？」

「いいだろ、別に」

「まあ基本的なことはワシがしておいたからいいとして。おまえは

どの辺に行きたいのじゃ？」

「どの辺って言うത്？」

「時代じゃよ時代。どのくらいに飛ばすか言ってくれ」

そうだな……。能力の確認もしたいから……。

「結構前の人がない辺りで頼む」

「分かった、でh「ちょっと待て。「なんじゃ？」

「俺はお前をなんて呼べばいい？お前の名前をまだ聞いてないんだが。」

「ふむ。そう言われてもものう。名前などないからのう。お前の好きに呼ぶといい。」

「俺の好きに……。か。」

こいつあれだろう、神様だろう？で、俺を転生させるんだらう？ん？転生？つまりは俺を新しく生み出すってことだろ？ってことはこいつは俺の産みの親？で、こいつジジイだらう？だったら呼び方は一つしかないな。よし！

「決まったかのう？」

「ああ。よろしくな、『親父』！」

「お、親父じゃと！なぜそうなった。」

「え？そりゃああなたは俺を転生させる、つまり、世界に新しく生み出すじゃないか。だからこそあなたは俺の親だ。という訳でよろしくな親父！」

「うむ。まあ好きに呼べといったのはワシじゃからなあ。まあいいじゃろう。」

「それじゃあ親父、転生よろしく。」

「うむ。それでは行くぞ。」

「ああ。」

さーて、地面に穴か？それとも扉か？どういつぶつにするんだ？

「ではっ！セイツツッ！！」「ゴインツッ！！！」

「ウガアアア！」

な、なんとという力技。親父、そりゃないよ。ガクツ……。

「ふむ。それにしても親父とは、面白い奴じゃったのう。まあ、こいつがどうこれからを歩むか、見守るしかないのう。」

ブログ（後書き）

何処か誤字脱字があったら教えてください。

これから受験シーズンですので更新は受験が終わってからになると思います。

設定（転生完了時）（前書き）

主人公設定載せます

設定（転生完了時）

名前：創理つくり 神羅しんら

能力：「幻想と現実を司る程度の能力」

属性：中立・中庸 特性：矛盾・混沌

能力値（平常時） f a t e 風

筋力：C - 魔力：C +（気含む）

耐久：D 幸運：D +

敏捷：B 宝具：n o t h i n g

神様から貰った力

1・「幻想と現実を司る程度の能力」

2・武器

上の1の能力に沿った内容のアイテム。

鍵型の「幻想之主」と本型の「現実之書」

どちらもそれぞれの能力に沿っているので、

能力の端末としても使える。

3・改変・改造能力

何かに効果、属性を付加、追加したり、形状や特性を変えることが出来る。

4・世界樹の苗木

その名のとおり、世界樹の苗木、

5・神様からのオプション
身体能力や容姿、情報、助言、その他の設定等
「便利なものをいただいた。」

名前：親父おやじ

職業：神 神格：「創造神」

容姿：白く長い髭の老人

悩み：仕事がない、

欲しいもの：仕事

最近まで暇だったので、主人公のサポートをするときに

不意打ちをかけたります。それほどまでに退屈な生活をしていた。

暇なときは人間の生活を眺める等暇つぶしをしていた。

転生完了！（前書き）

今回も思いついたものを書きました。

転生完了！

頭が痛い……。

まさか転生の方法があんなだとは思わなかったぜ。

「くっそ、親父め、今度会ったら一発殴ろう。絶対に。」

ピロリロリ

俺がそんな感じの決意をしている時、ズボンのポケット辺りから音が鳴った。

そっぴや俺の格好を伝えておこうと思う。一言で言うとジャージだ。

今の俺の格好は装飾のないただのジャージだ。そんなことはいいとして、俺はポケットの中から板のようなものを取り出す。

「なんか、スマホみたいだな。」

『おおっ！つながったつながった。ふいー、良かったわい。さて、つながったということは、おまえ、そこにおるじゃろう。』

親父だ。俺をぶん殴った親父だ。

「ああ。いるよ。」

『ふむ。無事に転生できたようじゃの。』

「転生する際に頭殴るってどういうことだよありゃ。」

『いやー。スマンのう、毎度お馴染み！みたいな奴じゃつまらんくなるじやろう。少しは別パターンでやってみんといかんじやる。そっちの方がワシ楽しいし。』

「ずいぶんと自分勝手だな、オイ」

このジジイやっぱアホだ

『ゴホンッ！では今の状況について教えようかのう。今の時代は人が最初に月に行く前………ではなく。そのヒトが人になる前位じゃ。』

マジか。それなら能力の確認をしやすいじゃないか。

『次に能力のことじゃ、おまえの能力に少し制限をする。最初の出力はせいぜい10%位じやのう』

「マジか、でもなぜ10%位なんだ？」

『おまえの能力はコントロールが完全になるまで数千年はかかるじやろう。それにおまえの魂、存在自体に刻ませてもらったからのう、馴染むまでに時間がかかると思うぞ。』

「そうk『それに』ん？」

『今のおまえには能力の出力的に1,2%位しか操れん、あまり大きなことをすると暴走するかもしれんからのう。まあ、頑張るしか

ないのう。』

「仕方がない。ま、どんなことができるか確かめるしかないか。」

『あ、それとお前は能力がまだコントロール出来てないから練習のために数百年不老にする腕輪が何かを送るからのう。』 ピッ

「切れた……………」

さて、アイテムを送るって言ってたがどこから来るんだ？

ヒュウウ~~~~ン

空から何か落ちてくる音！上か！

俺は顔を上げる。すると空から袋が落ちてきた。ふむ。あれか。

しかし俺が袋を掴もうとしたとき、下から何か俺の顎に高速でぶつかった。

「ガフツ…くそ…お…やじ……………」

箱のようなものが当たったようだ。しかしそこで俺の意識は途切れた。

ただひとつだけ言わせてもらう。意識が途切れる前にチラッとみえたクソ親父のニヤケ顔のイラストはとてつもなく……ウザかった。

転生完了！（後書き）

もう一話いけるかな？

能力確認

くそう、頭がグラグラする……。

「あのクソ親父め……。」「

俺は顎をさすりつつ俺を二度も気絶させたクソ親父の顔を思い浮かべていた。

そういえば何か送るって言ってたな。

「この袋か？」「

俺は端末をポケットに入れてから袋の中を探った。

「なんだこれ？」「

その中に入っていたものは親父が言っていた腕輪と手紙だった。

まあニヤケ顔のイラストは置いといて

「えーと、なに」「

『この手紙を見ているということは目が覚めたようじゃのう（笑）』

親父が気絶させたくせにこの冒頭はムカツク。

『まあ、ワシはここから見ておるから起きたことくらい分かるがのう。』

クソ親父。全部見てるのか。余計にムカツク。

『まあそんなことはさて置き、中身の説明をするぞ。その腕輪おまえの老化を数百年止めるものじゃ。』

その間に能力の修行をするといい。その間に人間が知能をもつじやろう。あと多分能力が馴染むまでに

数千年かかると思うんじゃ。その間はコントロール出来ても30、40%までじゃろうな。それと最後

に、忘れておつたが「世界樹の苗」だったかのう？あれはお前の近くに鉢に入れておいとるからのう。

あの苗は普通の木の大きさになるのに数千年かかるぞ。まあ育つてくるとその木からマナが発生するか

ら育ち具合が分かるじやろう。そこまで育つとほかの木と同じ位の速度で育つようになるじやろう。』

ふむ。まあまあ分かった。つまり俺のすぐそばのこの鉢が世界樹の苗、と。

「よし。今調べても仕方ないからな。とりま、能力確認しますか。」

親父から貰った能力は「幻想と現実を司る程度の能力」、俺が何故

この能力にした理由は応用が利くから

だ。幻想と現実をということは自分の想像つまり幻想を現実に持つてくること。簡単にいえば「具現」

や「実現」だ。これが出来るからこそ俺はこの能力を選んだ。解釈の仕方によるが「だいたいのこと」が

できる能力「極端にいうと」なんでも出来る能力「なのだ。

しかし、俺はまだコントロールが出来ないのでまずはそこからだ。

「よし。まずどこまで出来るか試さないとな。」

そう言い俺はまず棒を想像する。

「実現」

そうつぶやくと自分の手の中に1mくらいの木の棒が現れた。

「ふむ。」

と言って握ると、ポロポロと砕け始めた。

「まだまだか。」

このあと数十年くらいこつこつという修行が続いた。

早い進化

能力の修行を始めて200年ほど経った位の頃。俺は違和感を感じていた。少し前にヒトを見たんだが、

土器を作っていたり、竪穴式住居みたいなものを作ったりしていた。

「あまりにも進化が早すぎるだろ」

そう。俺が修行している間にヒトは知能や言語をもち、急激に進化していた。

ジュジュッ

ん、この機械音は……。親父。久しぶりだなあ。

『久しぶりだのう。元気にしておったか。』

「親父、久しぶり。と言いたいが……………」

『うむ。おまえの言いたいことは分かっておる。人間の進化の速度じゃろっ…』

「ああ。いくらなんでも早すぎるだろっ。」

『そのことじゃがのう。何らかのきっかけがあったんじゃろっ。1つの発見でも色んな選択肢が生まれ

るからのう。』

「まあある程度したら少し会いに行ってみるか」

『まあ対応としてはそれでいいじやろう。それにしてもおまえ、少しは能力のコントロールが出来るようになったようじゃのう。』

「ああ。棒とか球みたいな単純なものは完全に具現化出来るようになったぞ。」

『ふむ。おまえも進化が早いのう。出力としては15〜20%ってところかのう。』

「ま、そのくらいだろうと思うよ。でも刀とかは失敗しやすいけどな。」

『まだ武器類は難しそうだのう。』

「ああ、そのへんなんだよ。まだ芯の部分かな。」

『ふむ。そのことじゃったら簡単なことじゃ。おまえは今まで普通のもの、見本通りに作るうと思っとう。じゃが、それが原因なんじゃよ。』

「普通のものを作るうするのが悪いのか？」

『いやいや、悪いとは言わん。ただのう、その価値観に縛られすぎるとるのじゃおまえは。その能力はお

まえの、おまえだけの能力じゃ。ワシはそうなるようにおまえにそ

の能力を渡した。言ったじやろう、

おまえの《存在自体》に刻んだ、と。基本は大事じゃが、それじゃああまりにもつまらん。応用するこ

とこそその能力が活けるとこじやろ？まあ何かのマネをしていたから暴走しなかったのじやろう。しか

し、少しは別の方向性で作ってみてもいいと思うぞ。改造能力もおまえにやったじやろう。少しは使っ

てみるんじや。自分の幻想をそのまま形にするそう思っているじやろう。』

「自分の幻想を形に、ねえ。」

やってみますか。そう思い想像する。まずは鉄の棒。

鉄の詳しい構成など要らない。ただ単に鉄であれ。脆くない。ただ硬い鉄であれ。

実現

すると俺の手の中には黒い棒が1本現れた。

『どれ、貸してみる。……ふむ……ふむ。完全な鉄……じゃな。』

なんじやろう、鉄は鉄で間違いないのじやが、この微妙に含まれる物質が分からん。

まあ気にせずともいいじゃろう。いまは完全に成功したことを喜ぶべきか。

『よくやったのう。他に何か感想はあるかのう？』

「ああ。自分の幻想を形にすることのコツは分かった。だが他の物も出来るかどうかを試したい。」

『いくらでも試すといい。時間はたっぷりあるからのう。』

こいつ、進歩が早いのう。この速度じゃと物体以外もいけるかもしれんのう。

それから俺は同じようなことを繰り返した。

このとき、俺は自分の能力の凄さを改めて感じた。

しかし、この後の俺は集中のしすぎでまた気を失うのであった。

早い進化（後書き）

こんな感じの長さで上げていきます。

情報収集

親父にアドバイスを受けてからこれまた2000〜3000年が経った。

最近の人間の進化、発展は凄まじく、100年前くらいから、移動手段が機械類になったようだ。

ちなみに俺はというと、山奥の洞窟に拠点をつくり4000年くらい暮らしていた。たまに人間の様子を

見に行くが、行くたびに服装や乗り物の形が変わっているのには驚いた。

あれ？俺の時間の感じ方。おかしくないか？

そして最近は人間以外にも人型だったり狼型？の所謂妖怪、らしいものも増えてきた。

いや、昔もいたよ。3000年くらい前も、でもあの時代、まだ妖怪の方が知能が低くてね。

意思疎通がしづらかったんだよ。でも最近言葉を話す奴も出てきたようだし。今度喋りに行った方がいい

いか。ずっと能力の修行してたし。

能力の修行、と言えば。俺の能力、大体のことはできるようになってきた、と思う。

あと、ずっと放置してた世界樹の苗木が大体1mより低いくらいになった。そして何か粒子を少し出し始

めた。これが マナ だと思う。

そうそう能力の方だが、武器は大体出来る。が、光学兵器とか複雑なものは思い浮かべづらいから実現

しづらい。原型があれば後はどうとでもなる。そういうものだからこの能力。

しかし、妖怪、か。人間も街の外側に何かの柱を建て始めたからなあ。

仕方ない。一度人間のところで情報を集めるか。そう言いそこらへの街より一回りも二回りも大き

い、まさに“都市”と呼べる場所の近くに

「やって来たわけだが。」

どうするかね。今まではその辺りの近場の街を見て回っていただけなんだが。

こんだけ大きいと警備が厳重だろうな。

今までの街は割りと自然が多く、観光地みたいなくところだったのであるうほど外からの客が多く、大体

のことは人ごみに紛れて誤魔化せたんだがなあ。

今見ている都市は周りを高い壁で囲み、関所があるほどの都市だ。いかにも重要拠点だとか、偉い人い

ますよ。とか、すべての中心ですよ。みたいね感じで、中心部にはかなり高いビルがある。

「本当、進化しすぎだろ。」

仕方ない。ちょっと面倒だが、能力で切り抜けるか。

(想像するのは自分。誰にも見つからない自分。ただの空気と変わらない自分。)

実現

「ふう。」

これで周りと同化したはずだ。

今回は空気と変わらない自分なので、一応気体になれる。

が、長く気体のままだと戻るのに時間がかかる。だからギリギリ3秒……位が限界だと思う。

さて、潜入開始。

まず、関所のゲートだが、門に走っていき、開くタイミングで気体

へ。

そうすると他人はただの風としか思わない。

抜けたらすぐに実体に戻る。これで中に入ったのだが。この後どうするかねえ。

.....移動中.....

という訳で、偉い人がいそうなビルの中にやって来ました。

みんなは全く気づかない。まあそうだろうね。

仕方ない、親父に通信してみるか。

.....ピッ

「親父ー。久しぶりー。聞こえてるか？」

『おお。聞こえておるぞ。久しぶりじゃのう。そっちからかけるの初めてじゃのう。』

「ああ。聞きたいことがあるんだが。」

『その事じゃろっ？任せておけ。』

.....情報伝達中.....

「ありがとな。親父。」

『よいよい。ではのう。』 プツッ

親父から情報を貰った後、それを元に情報を集め、また中心のビルに戻っていた。

「さて、後は大きな情報でもとってきますか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9490z/>

規格外の行く道（仮）

2011年12月30日01時52分発行